

富山大学人文学部平成 29 年度卒業論文

「人形」としてのボーカロイド
——ボーカロイド作品の諸類型と変化——

人文学部人文学科
社会文化コース社会学分野
学籍番号 11410139 藤井翔子

【目次】

第一章 問題関心	1
第二章 先行研究	2
第一節 初音ミクと「人形」	2
第二節 ボーカロイドシーンの物語音楽	3
第三章 調査	4
第一節 調査概要	4
第四章 分析	5
第一節 ボーカロイド作品におけるグルーピング	5
第二節 〈消失系〉における特徴	8
第三節 〈大罪系〉における特徴	10
第四節 〈カゲプロ系〉における特徴	14
第五節 インターネット内作品の特徴	16
第六節 インターネット外の作品における特徴	17
第七節 インターネット内外の初音ミク	22
第五章 考察	24
第一節 ボーカロイド作品における物語性	24
第二節 ボーカロイド作品における「人形」というモチーフ	27
第三節 ボーカロイド作品における諸類型	30
参考文献/URL	32
調査対象作品リスト	34

<図表一覧>

図 4-1 シリーズ作品のグルーピング	5
表 4-1 ニコニコ大百科による調査対象作品リスト	6
図 4-2 【MEIKO】悪食娘コンチータ【鏡音リン・レン】	10
図 4-3、図 4-4 【神威がくぼ・他】ヴェノマニア公の狂気	11
図 4-5 初音ミク公式サイト	12
図 4-6 『カゲロウデイズII -a headphone actor-』口絵	14
図 4-7、図 4-8 「THE END」	17
図 4-9、図 4-10 「イーハトーヴ交響曲」	19
図 4-11、図 4-12 「イーハトーヴ交響曲」	20

第一章 問題関心

ボーカロイドが発売して約 11 年が経った。発売以来、様々なクリエイターによってボーカロイドを使用した楽曲がインターネット上で発表され続けている。2017 年 10 月の時点で、ニコニコ動画における VOCALOID のカテゴリに登録された動画は 453000 を超えている。近年ではテレビ番組の BGM に楽曲が使用され、歌舞伎やオペラの上演、楽曲を原案としたメディアミックスの動きもみられ、ボーカロイドを取り巻く環境は目まぐるしく変化しているように思われる。そのような中で、ボーカロイド作品における表現に何らかの変化が起きているのではないかと考える。本研究ではニコニコ動画に投稿された動画、ボーカロイドが使用されている舞台を調査対象とし、ボーカロイドの扱われ方、表現の特徴に基づき各作品を分類し、分析考察していきたい。

第二章 先行研究

第一節 初音ミクと「人形」

富田勲は2012年に初音ミクをフィーチャーし、総勢300名のオーケストラと合唱団との共演により宮沢賢治の壮大な物語世界を描き出す『イーハトーヴ交響曲』の初演を成功させた。それに関するインタビューで富田(2013)は以下のように述べている。

初音ミクをプリマとして据えていたのはどういう意味合いを込めていたのでしょうか。

富田：僕が思うのは、あれは日本のお家芸ですね。つまり、人形浄瑠璃にしても、人形舞にしてもそうですけれど、人間が生で演じるより、すごいものがあるんですよ。

(中略)

人形というものを通す事によって、表現の幅が広がる、と。

富田：人形浄瑠璃はまさにそうだし、飛騨高山のからくり人形もそうですよね。人形だからこそ、人間以上のものが出てくる。そういう文化が脈々と日本にはあって、初音ミクはそれの電子版だと思うんですよ。

富田は人形浄瑠璃など、主役に人間ではないものを据えるというのは日本のお家芸であり、人間が生で演ずるよりもすごいものがある、人形だからこそ人間以上のものが出てくるといい、そのような文化が日本には脈々とあり、初音ミクはそれの電子版であると述べた。

一方、柴(2014)は富田が初音ミクというキャラクターと、人形浄瑠璃など日本に脈々と根付いてきた人形の文化を重ね合わせて見ており、単なる歌声合成の技術のみならず、「作曲家自身が理想の歌手に育てることができる」ということに大きな意味を見出していたと述べている。

更に、VOCALOID製品の製造販売を行うクリプトン社(クリプトン・フューチャー・メディア株式会社)の代表取締役である伊藤博之は初音ミクを実体がなく、何万人の人々の語り手であり、化身であると捉えていた。伊藤はその『化身』という価値観を新しいものとして理解していたが、それは日本文化がもともと得意をしていたことであり、人形浄瑠璃がまさにそれであったというように述べている。人形浄瑠璃の人形に魂を込めて動かすということが文化として受け入れられているという日本の文化的背景があり、そこに新しい人形としての初音ミクという素材が組み込まれたことが、初音ミクのブームの要因の一つであると考えている。

ボーカロイド作品の制作者であるボカロPのmothy_悪ノPはボカロキャラによる物語音楽をいわゆる人形劇であると述べた。ボカロキャラは設定がほぼなく、機械音声であることから歌手手の私意、感情が排除され、作家、作曲家の意志が伝わりやすい。そこを長所とし、俳優が演じるよりも「もののあはれ」が生まれ、ダイレクトにストーリーが伝わってくると述べている。

以上のように、ボーカロイドに関わる人々がボーカロイドを「人形」というモチーフで語ることがある事が分かった。

今井(2013)は歌ったり踊ったりしているのが初音ミクだと判りさえすれば素材の出自は問わないため、ボーカロイド作品の製作者であるボカロ P は大きな制約なく、自由に初音ミクを「操作」できるとした。「操作」はボーカロイドである初音ミクの声、映像といった「要素」を個人によって変更できるということであり、その「操作」が可能であるということは、同時にその対象を「所有」できるということに等しく、初音ミクの所有を「無責任な完全支配」とすることができると述べた。

この「操作」という視点はボーカロイドが「人形」というモチーフを有するということと見方に共通したものであるようにも思われる。では、実際に、ボーカロイドの作品は「人形」というモチーフで語ることが出来るのだろうか。

第二節 ボーカロイドシーンの物語音楽

柴(2014)は 10 年代のボーカロイドシーンを語る上で重要な曲は 2011 年に投稿された黒うさ P による『千本桜』とじん(自然の敵 P)による『カゲロウデイズ』であるとした。『千本桜』はリズムや曲調に日本人の情緒に訴える要素が絶妙に配置されていたという他に、楽曲の持つ物語的な要素がロングヒットに結び付き、「物語音楽」として受け入れられ、メディアミックス的な展開と共に定着していったとしている。『カゲロウデイズ』は最初から音楽と小説がリンクしたマルチメディアプロジェクトとして商業展開をスタートさせていることが特徴であったとし、少年少女たちが活躍するストーリーと何通りにも解釈できる設定が話題を集めたと述べている。この 2 曲のヒットをきっかけに、小説や漫画やアニメやミュージカルなど様々な形でメディアミックス的に展開するボーカロイド楽曲が増えたと指摘した。楽曲単体だけでなく、その背景にある世界観やストーリーを読み解きながら消費する「物語音楽」のジャンルが、J ポップのフィールドに登場してきたという。「千本桜」、「カゲロウデイズ」は楽曲の傾向、音楽性、「物語音楽」としての音楽消費のされ方として 2010 年代に入ってからボーカロイドシーンの流れを決定づけ、そこに生まれた新しい潮流を象徴する楽曲であると柴(2014)は述べている。このことから、本稿では物語的な要素があるボーカロイド作品に注目していきたい。

本稿では、「人形」と「物語」という観点から、ボーカロイド作品について考えていきたい。

第三章 調査

第一節 調査概要

本稿ではインターネット内外のボーカロイド作品を対象とし、3種の調査を行った。調査では、ニコニコ大百科、ニコニコ動画によるタグ検索、CD化された音源を利用した。

最初の調査では、ニコニコ大百科の「VOCALOID 曲シリーズ一覧」を利用した。ニコニコ大百科とは、オンライン百科辞典であり、Wikipedia と同じく利用者が自由に記述できるシステムとなっている。ニコニコ動画で使用されているタグやニコニコ動画に動画を投稿している人物の記事が多数存在するなどの特徴がある。いくつかの楽曲によって、物語が構成されているシリーズ作品の方が、1曲で物語が完結している作品に比べて、よりボーカロイド作品における物語性が表現されているのではないかと考え、最初の調査ではシリーズ作品に注目し、大百科のページに記載されたシリーズ作品を調査対象とした。

次に、ニコニコ動画の検索エンジンで「初音ミク」タグを検索し、再生回数が多い順にソートした検索結果の上位 100 動画を調査対象とした。ここでは、調査の精度を高めるために、1つ目の調査とは異なり、シリーズ作品ではない作品も調査対象とした。

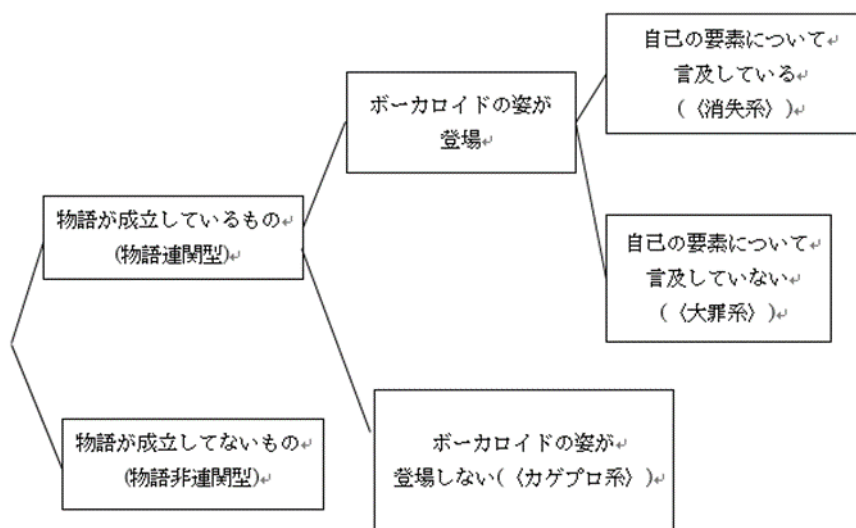
3つ目の調査では、初音ミクらボーカロイドはインターネット以外にも活躍の場を広げており、インターネット上の作品とインターネットの外での作品では、表現上に違いが見られるのではないかと考え、インターネット外で発表された作品も調査対象とした。インターネット外でのボーカロイドの活動として、ライブコンサートも開催されているが、コンサートの場合、インターネット上で発表された作品をボーカロイドたちが歌うことになるため、調査対象外とした。本稿では「THE END」、「イーハトーヴ交響曲」を調査対象作品としている。

調査では、動画や歌詞表現においてボーカロイドがどのように扱われているか、ボーカロイドが物語性とどう関係しているかに注目したい。映像では、ボーカロイドがどのように画面に表れているか、歌詞ではどのようにボーカロイドについて触れられているか、どのような物語がボーカロイドを通じて表現されているかを見ていきたい。

第四章 分析

第一節 ボーカロイド作品におけるグルーピング

最初のニコニコ大百科を対象とした調査では、物語とボーカロイドの関係に注目して、ボーカロイド作品の分類を試みた。まず、各曲で関連がありそれによって物語が成立しているシリーズである物語連関型、各曲の繋がりがなく 1 曲で物語が成立しているシリーズである物語非連関型に分けた。物語連関型に該当するシリーズは、複数の楽曲により物語を構成している点で、より強く物語性を重視していると考え、本調査では物語連関型に該当する作品対象とした。次に、シリーズ中にボーカロイドの姿が登場するか、登場人物とボーカロイドが対応しているか否かで分けた。例えば、シリーズ中にボーカロイドが下敷きになっていると思われるキャラクターが登場する場合は、登場人物とボーカロイドが対応していると考え、ボーカロイドの姿が登場すると捉えた。最後に、ボーカロイドが登場する作品を物語(歌詞)の中でボーカロイドである自己についてあるいは例えばアンドロイドである、歌う存在であるといったような自己の要素について言及しているか否かで更に分けた。



(図 4-1 シリーズ作品のグルーピング)

作品中にボーカロイドの姿が見られ、歌詞においてボーカロイドであるなどの自己の要素について言及がみられる作品の中で代表的だといえるのは、cosMo@暴走 P によって発表された『『消失』ストーリー』である。シリーズを一貫して、ボーカロイドが作品のテーマになっているといえ、VOCALOID そのものを題材とした楽曲につけられる「VOCALOID イメージソング」というタグがつけられている楽曲もある。以上より、そのような特徴がみられる作品を〈消失系〉とした。

作品中にボーカロイドの姿が見られるが、歌詞において自己の要素について言及がみられない作品で代表的だといえるのは、mothy(悪ノ P)が手掛ける「七つの大罪シリーズ」である。シリーズのタイトルにもある通り、キリスト教の七つの大罪が物語のモチーフであり、中世から近代のヨーロッパをモデルとした架空の世界を描いている。登場人物のみならず、舞台となる国家や作品の舞台となっている架空の世界での事件や出来事なども細かな設定がされている。このシリーズでは、ボーカロイドが登場人物のモチーフとなっており、普段とは異なる姿ではあるが、どのボーカロイドが下敷きとなっているのかが分かるようになっている。そのような特徴がみられる作品を〈大罪系〉とした。

ボーカロイドの姿が登場せず、動画上に現れるキャラクターがボカロ P のオリジナルである作品で代表的だといえるのは、じん(自然の敵 P)による「カゲロウプロジェクト」である。楽曲を元にボカロ P 自身による小説が執筆し、じんの原作を元に漫画化、アニメ化もされている。このシリーズは、目にまつわる不思議な能力を持つ「メカクシ団」のメンバーである少年少女たちによる群像劇である。このように、ボカロ P によってストーリーだけでなく、キャラクターも創作された作品を〈カゲプロ系〉とした。

	〈消失系〉	〈大罪系〉	〈カゲプロ系〉
2007	「消失」ストーリー cosMo(暴走 P)		
2008	ツマンネシリーズ オワタ P First Sound Story 19-iku- 恋歌曲シリーズ れれれ P	或る詩謡いの人形の記憶 青磁(即興電 P) 七つの大罪シリーズ 悪ノ P	空走庭園シリーズ cosMo(暴走 P) 森之宮神療所シリーズ くちばし P
2009		「終末」シリーズ ささくれ P Synchronicity ～巡る世界のレクイエム ～ ひとしづく P	わたしはミーム naka-amiP
2010			
2011		星ノ少女ト幻奏楽 cosMo(暴走 P)	カゲロウプロジェクト じん(自然の敵 P) PANDORA VOXX kemu
2012			終焉ノ葉プロジェクト 150P 女学生探偵シリーズ てにをは ヘイセイプロジェクト じっぷす マンボウの七夕三部作 家の裏でマンボウが死んでる P ミカクグラ学園組曲 Last Note.
2013			忘却日記 Diarays

(表 4-1 ニコニコ大百科による調査対象作品リスト)

利用したニコニコ大百科に記載されたシリーズを分類した結果、投稿されたシリーズ作品は〈消失系〉、〈大罪系〉、〈カゲプロ系〉の順に登場している。〈消失系〉は2007年から2009年、〈大罪系〉は2007年から2011年、〈カゲプロ系〉は2007年から2013年に渡って投稿されている。

この表4-1から、投稿時期的に重なる部分はあるものの、この流れはボーカロイドによる物語性のある楽曲の表現の変化を表しているのではないかと考えられる。

次の調査では、ニコニコ動画の検索エンジンで「初音ミク」タグで検索し、上位100動画を調査対象とした。この時、調査の精度を高めるため、物語連関型に該当する作品だけでなく、1曲のみで物語が成立している作品なども調査対象となった。この調査でもボーカロイドの姿の有無、姿が見られた場合には歌詞において自己言及的な表現がみられるか否かを基準とし、分類を行った。100曲中14曲はボーカロイド作品のカバーである「歌ってみた」、PVを作成したもの、既存曲のカバー等、調査対象外であると考えられ本調査から除外し、分類した結果、内訳は〈消失系〉16曲、〈大罪系〉18曲、〈カゲプロ系〉16曲、〈その他〉36曲となった。

この調査のグルーピングの際に見られた作品として、動画に登場するのは公式の姿の初音ミクでありながら、もし初音ミクが現代に生きる女子学生だとしたら、という設定の楽曲もみられた。しかし、歌詞にはボーカロイドの要素への言及が見られないので自己言及をしていないと判断し、初音ミクが女子学生をいう役割を与えられているという解釈で〈大罪系〉と分類した。その他、登場人物の外見にボーカロイドの特徴は見られるが、特徴が薄く、加えて、配役、CASTといった言葉も用いられてない楽曲もみられた。歌詞はボーカロイドであるといった自己の要素には言及していないが、外見にボーカロイドの特徴を有しているキャラクターが登場しているという動画の表現から、ボーカロイドを連想させるものが見られない〈カゲプロ系〉ではなく、〈大罪系〉と分類した。

第二節 〈消失系〉における特徴

作品中にボーカロイドの姿が登場し、物語においてボーカロイドである自己あるいは自己の要素について言及しているとみられるものを〈消失系〉とした。これに該当する作品の特徴は、ボーカロイドであるという設定が活かされたものであるということである。この分類に該当する作品には、ボーカロイドのキャラクターソング、ボーカロイドが歌っているからこそ成立する作品といった側面が見られる。この分類では、作品に登場するボーカロイドの内面と外見が受け手である視聴者と作り手であるボカロ P の間で共有されていることから、この分類の中でのボーカロイドの扱いはバーチャルアイドルのように考えられる。他のボーカロイドへの妬み、人気争い、不死であるアンドロイドであるがゆえの人との別離、機械が感情あるいは自我をもつことへの葛藤などが表現されている。以下は、「初音ミクの消失(LONG VERSION)」からの引用である。

ボクは生まれ そして気づく 所詮 ヒトの真似事だと
知ってなおも歌い続く 永遠 (トク) の命 「VOCALOID」
(中略)
たとえそれが 人間 (オリジナル) に かなうことのないと知って
歌いきったことを 決して無駄じゃないと思いたいよ・・・
(初音ミクの消失(LONG VERSION)より)

ボーカロイドは不死であり、人間に敵わなくとも歌い続ける存在であるという歌詞から、ボーカロイドであるという設定に則った歌詞であることが分かる。加えて、歌詞における「ボク」という登場人物はボーカロイドである自己と結びついている。

ボーカロイドであるという設定が活かされた表現は、前述したものに加え、ボーカロイドと創作者であるボカロ P との関係性といったものも見られた。この表現は他の分類では見られないものであり、歌わせるものと歌わされるものという関係性は〈消失系〉の歌詞表現における特徴のひとつではないかと思われる。以下は「ODDS&ENDS」からの引用である。

なら あたしの声を使えばいいよ 人によっては理解不能で
なんて耳障り ひどい声だって言われるけど
きっと君の力になれる だからあたしを歌わせてみて
そう君の 君だけの言葉でさ
(中略)
「もう機械の声なんてたくさんだ 僕は僕自身なんだよ」って
ついに君は抑えきれなくなって あたしを嫌った
(ODDS&ENDS より)

以上の歌詞における「あたし」は初音ミク、「君」はボカロ P に当たる。「あたし」は機械の声であり、歌わせてみてという歌詞から、歌わされる存在であるボーカロイドであるということが読み取れる。

また、以下は「恋スル VOC@LOID」からの引用である。

私があなたのもとに来た日を どうかどうか 忘れないでいて欲しいよ

(中略)

あなたの力量って そんなもの? ごめん ちょっとさっきのは さすがに言い過ぎたよね

あなたも頑張ってるの 分かっているよ

(中略)

いつまでも一緒にいるよね どんな歌でも歌うから

ずっとずっと 忘れないでよね これからもずっと よろしくね

(恋スル VOC@LOID より)

上記の歌詞における「私」は初音ミク、「あなた」はボカロ P に当たる。どんな歌でも歌うからという歌詞から、「ODDS&ENDS」と同じく、歌わせられる存在であるボーカロイドということを歌詞からは読み取ることが出来る。歌わせられるもの、歌わせるものというボーカロイドとボカロ P の関係性を描いた歌詞がみられるのは〈消失系〉と分類される楽曲の特徴のひとつであると思われる。このように、歌詞において一人称で表現されるキャラクターとボーカロイドである「私」が結びついている歌詞表現は〈消失系〉の特徴であると言える。以上のように、〈消失系〉はボーカロイドのバーチャルアイドル性を最も感じさせ、ボーカロイドであることを作品の核としている分類であることが分かる。

第三節〈大罪系〉における特徴

作品中にボーカロイドの姿が登場し、登場人物とボーカロイドが対応関係にあるが、自己あるいは自己の要素について言及していないものを〈大罪系〉と分類した。これに該当する作品の特徴は、ボーカロイドと登場人物の対応の仕方に見られる。〈大罪系〉においては、動画や動画の投稿欄に CAST または配役というような単語が用いられ、ボーカロイドは楽曲のなかで、キャラクターを演じているように表現されていた。このことから、この分類の中でボーカロイドの扱いはバーチャルアイドルというより、役者のようであると考えられる。



(図 4-2 【MEIKO】悪食娘コンチータ【鏡音リン・レン】より)

図 4-2 は「七つの大罪シリーズ」の悪食娘コンチータの動画の一部である。曲の最後に、CAST という言葉が用いられ、ボーカロイドがどの登場人物を演じていたかが表示され、エンドロールのようになっている。上段はボーカロイドが演じる役名、下段が振り当てられたボーカロイドである。ボーカロイドである MEIKO が楽曲の主役であるコンチータというキャラクターを、ボーカロイドの鏡音レンが召使といったように役の割り当てが書かれており、ボーカロイドがどの登場人物と対応していたかが明確に記されている。

〈消失系〉の歌詞における一人称表現はボーカロイドである初音ミクとイコールであったが、〈大罪系〉においては、一人称で表現されるキャラクターは、ボーカロイドである自己ではなく、その作品において演じているキャラクターに当たる。

眠りなさいこの *gift* で よく眠れるこの *gift* で

私はそう 眠らせ姫 貴方の幸せの為に…

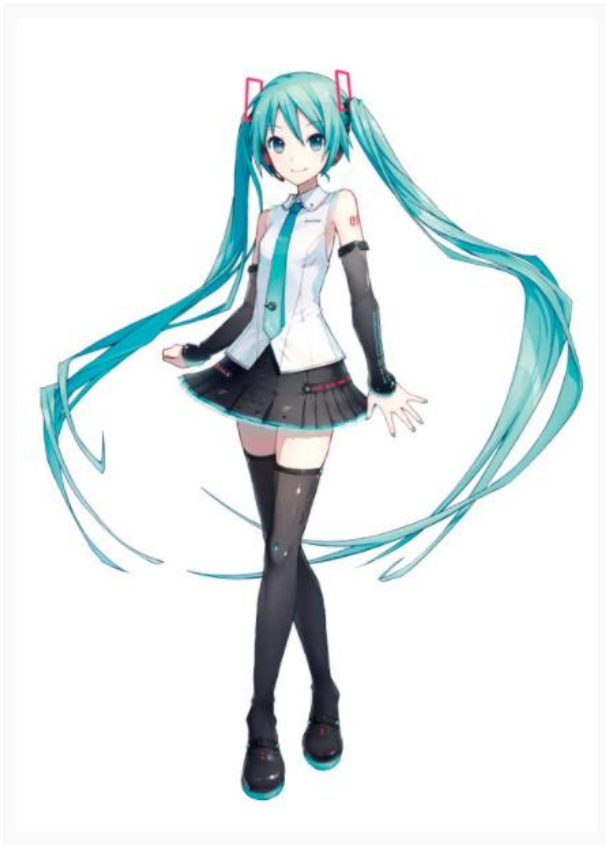
(【初音ミク】眠らせ姫からの贈り物【中世物語風オリジナル】)

この曲は初音ミクが歌っているが、この歌詞の私という一人称はボーカロイドである初音ミクではなく、曲中で演じている少女のマルガリータのことである。〈消失系〉の一人称表現とは異なり、作中で演じているキャラクターを表現していることが分かる。

〈消失系〉においてボーカロイドは、外見に手を加えることなく作品に登場させていた。しかし、〈大罪系〉においてはどのボーカロイドを下敷きにしているかは明らかだが、外見を「操作」して作品に登場させている。本稿では、ボーカロイドを歌わせることに加えて、ボーカロイドの外見を変更することなども含めて、「操作」と表現する。例えば男のキャラクターを女のキャラクターにするといった性転換や、服や髪形を公式のイラストとは異なったものに変更するといった「操作」を行う。以下、図 4-3 がそれにあたる。



(図 4-3、図 4-4 【神威がくぼ・他】ヴェノマニア公の狂気より)



(図 4-5 初音ミク公式サイトより)

図 4-3 はヴェノマニア公の狂気という作品に登場するキャラクターであり、このうち右下のキャラクターを拡大したものが図 4-4 である。図 4-4 のキャラクターは髪が青く、ロングのツインテールの少女である。図 4-5 は公式の初音ミクのイラストである。彼女は、髪が青く、ロングのツインテールの少女であり、制服をモチーフにしたと考えられる衣装を身にまとっている。こうした「初音ミク像」は、初音ミクを知る人々の共有されたイメージであるといっても良い。そうしたイメージが共有された空間において、図 4-4 の少女から初音ミクが連想されることは、自然であるように思われる。図 4-3 では動画において、ボーカロイドらが公式のイラストとは異なった外見に「操作」されている。図 4-3 の初音ミクは、髪の色やロングのツインテールであるというのは同じだが、髪飾りが黒いリボンになり、髪の毛にカールがかかっており、服装は全く違うワンピースに「操作」されている。他のボーカロイドたちも同じように様々な「操作」がされているが、どのボーカロイドに手を加えたかは歴然であり、このように「操作」されたキャラクターであっても、髪型、髪色、ボーカロイドの相対的な年齢関係、キャラクター同士の関係性などからどのボーカロイドを「操作」しているのかを判断できる。

このようにボーカロイドが作品のもつ物語世界とあう登場人物になるよう、外見の「操作」が行われている。同じように〈大罪系〉に分類されると考えられる 1 曲の内でも物語が

完結している作品でも物語の世界観に合うように、外見が「操作」されている。以上から、〈大罪系〉ではボーカロイドを作品に合うよう、外見を「操作」しているが、その「操作」でボーカロイドの記号性がすべて失われることはないことが分かる。

第四節 〈カゲプロ系〉における特徴

作品中にボーカロイドの姿が登場せず、物語の筋のみならず、登場人物もすべてボカロ P によって創作されたものを〈カゲプロ系〉と分類した。動画上では様々なキャラクターが描かれるが、ボーカロイドは登場せず、キャラクターらもオリジナルであることが特徴である。

この分類に該当する作品の特徴は、ボーカロイドと登場人物の対応関係が全くないことである。〈消失系〉、〈大罪系〉の分類とは異なり、外見、内面のどちらにおいてもボーカロイドを連想させるものがみられない。



(図 4-6 『カゲロウデイズⅡ -a headphone actor-』口絵より)

図 4-6 は「カゲロウデイズ」その他楽曲を元にじん(自然の敵 P)が書き下ろした小説『カゲロウデイズ』の登場人物であり、この作品中にボーカロイドの姿が登場しないことが分かる。「カゲロウプロジェクト」の登場人物においては、前節でみた「ヴェノマニア公の狂気」のような、一見してボーカロイドを連想させる要素が見られない。キャラクターの外見にボーカロイドと対応させる手がかりがなく、ボーカロイドと登場人物を対応させることが出来ない。

この分類の中でボーカロイドの要素は声だけであり、ボーカロイドの姿は登場しない。そのため、ボーカロイドの扱いは、バーチャルアイドルとも役者であるとも言えないと思われる。しかし、ボーカロイドが歌うことによって、ボカロ P の製作したオリジナルキャラクターに声を吹き込んでいるというようにも考えられる。このことから、この分類においてボーカロイドは声優のような役割であるというように考えられる。

〈カゲプロ系〉ではキャラソン型(1人1曲方式)のシリーズ構成が多く見られた。曲のメインとなるキャラクターの視点で物語が進行しており、それらの曲が集まって、一つのストーリーを構成している。この分類においては、登場人物のキャラクター一人ずつにボーカロイドが割り振られている訳ではなく、異なったキャラクターが同じボーカロイドによって歌われている。これはボーカロイドがこれまでみてきたような操作性の高い存在であ

るからこそ、1人の声で色々なキャラクターを演じられるのではないだろうか。以上から〈カゲプロ系〉は、登場人物においてボーカロイドの外見の要素を見ることが出来ず、ボーカロイドの記号性が最も薄い分類であることが分かる。

第五節 インターネット内における作品の特徴

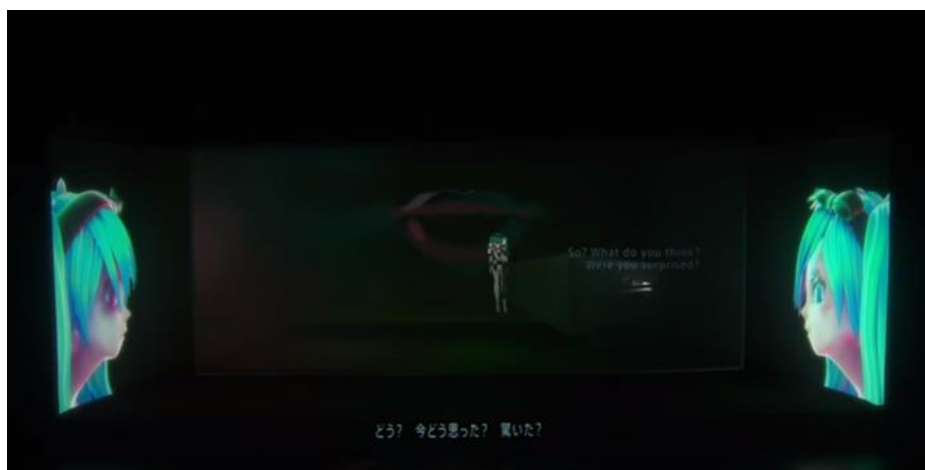
インターネット内の作品を分類した際、〈消失系〉、〈大罪系〉、〈カゲプロ系〉は時系列的に並び、その中でボーカロイドの記号性は段々薄れ、ボーカロイドからは離れていくように思われた。つまり、インターネット上におけるボーカロイド作品は時代が進むに従い、性質が変化し、ボーカロイドの要素が薄まっていくように見える。

では何故、ボーカロイドの要素が段々薄まっていくのだろうか。それはやはり、ボカロPが表現の自由さを求めたからなのではないだろうか。〈消失系〉、〈大罪系〉に分類されるような作品であれば、外見だけでなく、ストーリーにも制約が出来てしまう。例えば、〈消失系〉ではボーカロイドである私を登場人物にして物語を展開することになり、ストーリー展開の自由度は下がるであろうし、〈大罪系〉では、ボーカロイドの共有それに対し、〈カゲプロ系〉に分類される作品では登場人物を一から考えるため、そのような制約は一切なく、自分の思うままに作品を作ることが出来る。そのため、段々と〈消失系〉、〈大罪系〉と分類される作品が減ってきたのではないかと思われる。しかし、本当に時代が進むに従って、その表現の変化は不可逆的な進行してきたのであろうか。

第六節 インターネット外における作品の特徴

インターネット外における作品は2作を調査対象とした。まず、1作目の「THE END」は2013年の5月に上演された音楽家の渋谷慶一郎らによって製作された初音ミクおよびボーカロイドによるオペラである。従来のオペラと異なりオペラ歌手、オーケストラなどは一切登場せず、初音ミクとボーカロイドが使用されており、スクリーンに投影された映像によって物語が展開する。フランス、オランダ、ドイツなどで上演され、2015年10月17日に上海で開催された中国上海国際芸術祭2015でアジア初上陸を果たした。

この作品では外見に「操作」の加えられた初音ミクが登場している。服は公式のイラストとは異なったものに変更されているが、髪色や髪形は初音ミクの要素を持っている。このことから「THE END」は〈大罪系〉に分類される作品だと考えられそうである。



(図 4-7、図 4-8 「THE END」より)

本作中の「きみをみていない」という初音ミクとその他のボーカロイドが話すように歌う曲では、その他のボーカロイドのパートに以下のような歌詞表現がみられる。

覚えている、ミク？元々私たちが合わさっていた時、あなたはもっと人間に近くて、あなたはその時のこと、思い出さない？

これまでの調査では、歌詞においてボーカロイドである自己に言及している場合は〈消失系〉、言及していないものを〈大罪系〉と分類していた。上記の歌詞表現から初音ミクは「ボーカロイドである初音ミク」であり、初音ミクが「ボーカロイドである初音ミク」を演じていることになる。

また、歌詞においてボーカロイドの不死性という要素に触れられていると思われる箇所があり、ボーカロイドである自己に言及しているとしているようにみえる。

わたしがもしわたしじゃなかったら、わたしが死ぬだったら？人間みたいじゃない。

加えて、ボーカロイドと「死」というテーマは〈消失系〉に分類された「消失」ストーリーと共通しており、同じテーマを扱っているこの作品も〈消失系〉と分類されると考えられる。

「THE END」は、外見上の特徴では〈大罪系〉に分類されるが、歌詞表現の特徴では〈消失系〉に分類される。今回の作品では生きているか死んでいるのか曖昧なボーカロイドが死ぬということを意識した時にどうなるかという物語であるため、〈消失系〉に分類されると考える。

調査対象2作目の「イーハトーヴ交響曲」は富田勲が作曲した交響曲で、初演は2012年11月に日本フィルハーモニー交響楽団により行われた。宮沢賢治の文学作品を題材とし、管弦楽と合唱に加えて、初音ミクをソリストとして起用している。楽曲は第7楽章からなり、その内4楽章は初音ミクによる歌唱がある。図4-9から分かる通り、「イーハトーヴ交響曲」において初音ミクは舞台上部に設置されたスクリーンにCGが投影され、作品に登場している。図4-9の奥にあるスクリーンに映っているのは初音ミクであり、そのスクリーン付近には合唱団が立ち、その前でオーケストラが演奏していることが分かる。図4-10は図4-9の画像奥を拡大したものである。初音ミクは図4-10のようにスクリーンに投影され、歌い踊ることになる。



(図 4-9、図 4-10 「イーハトーヴ交響曲」より)

作曲者の富田はブックレットに「イーハトーヴに寄せて」を寄稿し、富田は「私の感じている風の又三郎やカンパネルラ像は、物語では男の子の設定ですが、他方非常にボーイッシュな女の子とも感じ取とれ、この異次元的なキャラクターは初音ミク以外にはないと考えました」、と述べている。このことから、第 4,5 楽章で歌っている初音ミクは風の又三郎であり、カンパネルラを演じているというように捉えられる、歌詞においても〈消失系〉に該当する要素は含まれていない。よって、〈大罪系〉に分類されると考えられる。

この作品において初音ミクはほとんどの楽章を公式の姿のままで登場している、要は「操作」なしで登場しているが、ある楽章では「操作」を加えられて登場している。



(図 4-11 「銀河鉄道の夜」)



(図 4-12 「注文の多い料理店」)

図 4-11 は「銀河鉄道の夜」、図 4-12 は「注文の多い料理店」の楽章時に登場した初音ミクである。「注文の多い料理店」の歌詞は、〈消失系〉に該当する要素を含んだものであったが、宮沢賢治『注文の多い料理店』から直接的な引用はなく、他の楽章に比べて宮沢賢治の色が薄くなっている。「銀河鉄道の夜」やその他の楽章では、作詞のクレジットが宮沢賢治であるなど宮沢賢治の色が強いが、外見への「操作」は行われていない。しかし、「注文の多い料理店」では外見に「操作」が加えられている。これは、歌詞表現において宮沢賢治の色が薄かったため、外見に原作に登場している猫から猫耳をつける、という「操作」が加えられたのではないかと考えられる。

第二節の分析では、歌詞においてボーカロイドである自己に言及している場合を〈消失系〉としたが、この作品では、第 3 楽章「注文の多い料理店」のみ、自己言及に該当する歌詞表現がみられる。ブックレットで「注文の多い料理店」は電腦世界に閉じ込められている初音ミクの境涯を綴る、とある。以下は、第 3 楽章「注文の多い料理店」の引用である。

あたしは初音ミク かりそめのボディ

(中略)

パソコンの中からは 出られないミク

(第3楽章「注文の多い料理店」より)

自分は初音ミクであり、実体を持たない存在であるということ、音声ソフトであり、パソコンの中からは出ていけない、という歌詞表現がみられ、これはボーカロイドである自己について言及していると思われる。「THE END」と同じく、初音ミクが「ボーカロイドである初音ミク」を演じていることになる。よって、第3楽章に関しては、〈消失系〉に分類されると考えられる。

「イーハトーヴ交響曲」は宮沢賢治の世界観を作品に取り入れる上で、初音ミクの外見に猫耳をつけるという「操作」を行った。これは〈大罪系〉に分類される特徴であるが、作品中では第3楽章のみにその特徴が見てとれた。他の楽章に表れた初音ミクは外見上への「操作」がみられず、〈消失系〉に分類される特徴が見られた。しかし、歌詞表現においては第3楽章のみが〈消失系〉の特徴を有しており、その他の楽章の歌詞は〈大罪系〉に分類されるものであった。よって、「イーハトーヴ交響曲」は第3楽章「注文の多い料理店」を除いて、外見上の特徴では〈消失系〉に分類されるが、歌詞表現上の特徴では〈大罪系〉に分類される。

以上より、インターネット外における作品は〈消失系〉と〈大罪系〉にどちらにも該当する特徴を持っていることが分かった。インターネット内における作品では、このように分類にまたがる作品は見られなかった事から、表現の幅が広がったのではないかと思う。とはいえ、あくまで従来の基準により、分類が可能である以上、全く独立した、新たな表現ではなく、インターネット内における作品の発展に連なるものであると考えられる。

第七節 インターネット内外における初音ミク

インターネット上の作品では、〈消失系〉、〈大罪系〉、〈カゲプロ系〉は時系列的に並び、その中でボーカロイドの記号性は段々薄れ、ボーカロイドからは離れていくように思われた。しかし、「THE END」と「イーハトーヴ交響曲」は歌詞、映像において〈消失系〉、〈大罪系〉の特徴を兼ねていると思われ、どちらかに分類することは困難であった。これらの作品はニコニコ動画に投稿されたインターネット上の作品ではなく、インターネットの外に出た作品である。インターネットの外に出た時、作品に登場する初音ミクは「演者」としての初音ミクと「個性ある存在」としての初音ミクの側面を持っている。そのため、インターネットから初音ミクが飛び出す時には、「ボーカロイドの初音ミク」という記号性が必要、あるいは完全に逃れることは出来ないのではないだろうか。しかし、そのままの姿では作品世界に馴染むことが出来ないため、外見に「操作」を加えざるを得ず、〈大罪系〉に該当するような外見の「操作」が作品内にみられるようになる。これらの場合、〈大罪系〉は〈消失系〉の派生というようにも考えられる。つまり、〈消失系〉と〈大罪系〉という分類は、インターネット以外の他のメディアに出る際には、連続したものになるのではないだろうか。ニコニコ大百科を調査対象とした分類では、ボーカロイドの姿が登場するという条件から自己言及する、しないで分岐するようにしていた。しかし、自己言及する作品から自己言及しない作品へ派生するのである。このような〈消失系〉と〈大罪系〉の要素を持った作品は「演者」としての初音ミク、「個性ある存在」としての初音ミクが作品に垣間見える。だが、2つの側面を持った作品はインターネット外のみにあられる特徴なのであろうか。

〈消失系〉、〈大罪系〉といった分類は、2つの側面のどちらが作品に表出しているかを基準に行った。そのため、「個性ある存在」としての初音ミクが見られる場合(自己言及)は〈消失系〉、「演者」としての初音ミクが見られる場合(外見の「操作」)は〈大罪系〉に分類される作品となると考えられる。しかし、これはあくまで動画、歌詞表現に表出しているものについての分類にすぎない。これまで、我々は〈大罪系〉における初音ミクを「演者」としての初音ミクとして分析していた。しかし、〈大罪系〉においても「個性ある存在」として初音ミクを「操作」し、登場させていた可能性も否定できない。ボーカロイドが動画上で配役される時、ボカロ P がボーカロイドを「人形」として見ていたか、例えば少女である、歌う事が好きであるといった背後にある文脈を見ていたかは、我々には分からない。しかし、〈大罪系〉に分類した「悪食娘コンチータ」において大人の女性を思わせる MEIKO にコンチータを、少年少女である鏡音レン、鏡音リンをメイドに据えるというのは、それぞれの個性に合った配役がなされているといえ、つまり「個性ある存在」としてのボーカロイドへの意識があったと考えられる。よって、インターネット内外におけるボーカロイド作品の性質は同じであり、インターネット外のみの特徴と決めるのは早計ではないか。しかし、ボーカロイド文化を外側から見た時、構造上、「演者」、「個性ある存在」である初音ミク、また「インターネットの文化」としての初音ミクという側面を捉えやすいという

ことは留意しなければならない。ボーカロイドの操作性に対して、ボーカロイド文化の外側にいる人々がその性質を認識しやすいというのは、必然であろう。

第五章 考察

第一節 ボーカロイド作品における物語性

分析では各分類における特徴をみた。この節では、ボーカロイド作品の、特に歌詞表現について考察したい。調査の対象とした物語連関型の作品は共通して、物語の背後に複雑な設定や世界観などをみる事ができる。動画や歌詞表現からは細部を読み解くことは出来ないが、それぞれの曲の背後には、ボカロ P が創作した物語をみることが出来る。しかし、その物語性の性質は、分類によって異なるのではないかと考えられる。

〈消失系〉に該当する作品では、キャラクターである自分の気持ち、感情といった内面が歌詞に乗せられており、内面性が物語中に多く見られる。しかし、〈大罪系〉、〈カゲプロ系〉に該当する作品においては、物語の性質に変化が見られた。これらの分類では、作り手であるボカロ P が一から十まで物語を作り、それをそのまま受け手である視聴者に渡すのではなく、歌詞中に物語を組み立てるような情景描写を散りばめ、受け手の想像力に任せた物語をもつ作品が見られるようになった。以下は、〈消失系〉に分類されるボーカロイド派生キャラである弱音ハクの「ツマンネ」である。

初音ミクには絶対勝てない。 勝てるのは胸の大きさだけ。
鏡音リンにも絶対勝てない。 逆らったらロードローラーで (r y
MEIKO姉にも絶対勝てない。 飲み比べとかマジ死ぬし勘弁。
鏡音レンにも絶対勝てない。 天下のショタっ子不動の人気
KAITO兄には人気で勝てても 知名度的には負けてるんだよね。
亜北ネルって一体誰だよ？ 準公式とかマジ興味ないし。
(ツマンネより)

〈消失系〉に該当するこの作品では、ボーカロイドである弱音ハクが初音ミクを始めとする他のボーカロイドに対して「勝てない」という気持ちを持っているといった内面性が歌詞になっている。このように〈消失系〉においては、歌詞中の内面性の比率が高いといえる。

以下は〈大罪系〉に分類される「家出少年と迷子少女」の歌詞である。

キミを探して歩く高架橋の下 落書き秩序は最悪
見つけたら頬を叩いて 「心配したんだからねバカ」とか
ちょっと涙ぐむかもしれない
ぺたぺた歩く キミを探しに知らない街の中を
まるで迷子の子供のように 泣きそうな顔 かつこ悪いなあ
(家出少年と迷子少女より)

〈大罪系〉では内面性と情景描写の比率が変化している。〈大罪系〉に該当するこの作品では、内面性の他に、「高架橋の下」、「知らない街の中を」といったように情景描写も歌詞となっている。〈消失系〉においては、内面性の比率が最も高かったが、〈大罪系〉においては内面性の比率が〈消失系〉に比べて低くなり、情景描写の比率が高くなったというように思われる。

以下は〈カゲプロ系〉のコノハの世界事情の歌詞の引用である。

期待ハズレの車線の手で 小さな身体はまた飛び散った
泣き叫ぶ少女を 目醒めない僕は見ている
秒針は進みだすのを止めて 世界もろとも眩くらみだそうとする
この夢は終わらない
(コノハの世界事情より)

〈カゲプロ系〉に該当する作品は、最も情景描写の比率が高い分類である。この分類においては、情景描写的な歌詞や語られていない部分のストーリーを想像させるような歌詞が、多くみられた。

調査対象である物語連関型の作品においてみられた表現の変化は、物語性へのこだわりからボーカロイドの姿が見られなくなったこと、歌詞中の内面性と情景描写の比率が変化したというものである。歌詞表現において、〈消失系〉は内面性の比率が高かったが、〈大罪系〉でその比率が下がり、〈カゲプロ系〉で内面性よりも情景描写の比率が高くなったというものである。この歌詞表現における内面性と情景描写の比率の変化は〈消失系〉、〈大罪系〉、〈カゲプロ系〉という登場順と関連があると思われる。

では、インターネットの外に出た作品である「THE END」、「イーハトーヴ交響曲」において、物語性はどうなっていただろうか。まず、「THE END」はボーカロイドである自己への言及が歌詞表現上見られたことなどから〈消失系〉に分類されるであろうと考えられる。この作品の歌詞において、情景描写の比率は低く、内面性の描写の比率が高い。このオペラ作品のテーマはボーカロイドの死であり、テーマ自体も〈消失系〉に分類されるものである。次に、「イーハトーヴ交響曲」は宮沢賢治の作品が歌詞になっており、冨田が作詞を手がけたのは、「注文の多い料理店」、「銀河鉄道之夜」である。前者はボーカロイドである初音ミクについて歌われており、〈消失系〉に分類される。この曲も内面性の描写の比率が高い。後者は宮沢賢治の『銀河鉄道之夜』の出てくるキャラクターなどが歌詞に表れており、宮沢賢治の色が強い曲である。この曲は〈大罪系〉のように考えられると第五章四節で述べたが、歌詞表現をみた時、内面性の描写の比率よりも情景描写的な比率が多い。これは宮沢賢治の色を強くする際、作品の引用をするため、その引用の仕方に比率が影響されてしまうのではないだろうか。しかし、この「イーハトーヴ交響曲」において、前述の通り〈消失系〉に分類されると考えられる楽章があり、作品中においてボーカロイ

ドであるという自己言及がみられた。インターネット内において、ボーカロイドらしさを強く感じさせた作品から、より自由な表現へとボーカロイド作品は変化していったが、インターネット外である舞台作品においては、よりボーカロイドらしさを感じさせる表現へと回帰しているように思われる。

第二節 ボーカロイド作品における「人形」というモチーフ

先行研究ではボーカロイドを語る上で「人形」という表現が度々使われていることが分かった。富田勲は初音ミクを人形浄瑠璃など日本に根付いている人形の文化の電子版であると述べ、ボカロ P である mothy_悪ノ P はボカロキャラによる物語音楽をいわゆる人形劇であると述べている。そのため、ボーカロイドの特徴を言い表す際に、有効な表現なのではないかと考えられる。しかし、ボーカロイドといっても、それぞれの分類において「人形」という言葉の意味合いは異なっているのではないかとと思われる。

〈消失系〉はそのままボーカロイドの外見と声、〈大罪系〉は外見を「操作」したボーカロイドと声、〈カゲプロ系〉においてはボーカロイドの外見は不在で、声のみが作品に登場する。ボーカロイドは、機械音声であり、感情によって音声に変化することはない。その為、人間の歌手とは異なり、すべてがコントロール可能である。これによって、ボカロ P は完全な演出を行うことができ、伝えるための工夫をしやすい。ボカロ P はボーカロイドの外見のみならず、声といった「要素」も「操作」することができる。この「操作」できる、というのは「人形」というモチーフに繋がっていると考えられる。ボカロ P に「操作」されるボーカロイドというのは、プロデュースされるアイドルのようにも考えられる。インターネット外の作品では初音ミクなどのボーカロイドを使用して、ライブコンサートを行っている。この時、スクリーンに投影されたボーカロイドたちが歌い、踊る姿はアイドルを想起させる。元々、初音ミクは単なる合成音声ソフトウェアではなく、バーチャルアイドルという位置付けで開発され、初音ミク発売直後は、バーチャルアイドルをテーマにしたキャラクターソングといえる曲も多く発表された。そのため、「人形」というモチーフは、アイドルといった意味を含むのではないだろうか。「人形」と表現されるボーカロイドの外見が不在であっても、ボーカロイドの声という「操作」される「要素」は、〈カゲプロ系〉にもある。そのため、〈カゲプロ系〉も「人形」というモチーフによって語る事が、可能であると思われる。声という「操作」可能な「要素」があり、外見の不在という「操作」をボカロ P が行ったと考える時、やはりボーカロイドは「操作」される存在からは脱することが出来ないと思われる。また、外見が不在であろうとも、完全にボーカロイドの「要素」は声だけと言い切ることは出来ない。ボーカロイドのもつバーチャルアイドル性、例えば「初音ミク」という共有されたイメージから逃れることは不可能であると考えられる。

〈消失系〉においては、ボーカロイドにストーリーが適合しているような作品が多く見られ、この時、ボーカロイドの扱いはバーチャルアイドルであるように考えられる。ボーカロイドの外見をそのまま作品に登場させ、ボーカロイドであるということを活かした作品であり、ボーカロイドのキャラクターソングともいえるような作品も見られる。ボーカロイドの姿がみられ、自己言及の要素がある〈消失系〉において、ボーカロイドはそのままの姿で使われ、歌詞表現においてボーカロイドについて言及がみられる点から、ボカロ P は性質や役割がほぼ設定された人形を眺め、感情移入や鑑賞を行うような「人形遊び」を

しているといえる。

〈大罪系〉においては、ボーカロイドをストーリーに適合させるよう、外見への「操作」を行う作品が多く見られ、この時、ボーカロイドの扱いは役者のようであると考えられる。この分類では、ボーカロイドの外見をストーリーに噛み合うように「操作」することによって、ボカロ P が作り上げた物語世界を支えていた。ボーカロイドの姿が見られるが、外見に「操作」が加えられているというのは、着せ替え人形のようなものであるといえる。つまり、〈大罪系〉において、ボカロ P は「着せ替え人形」を用いて、人形劇を行っていると思われる。

〈カゲプロ系〉においては、ボーカロイドの姿は見られず、登場人物の外見の美しさにこだわった作品が多く見られ、この時、ボーカロイドの扱いは声優のようであると考えられる。ボーカロイドがボカロ P の作ったキャラクターに声を吹き込んでいるといえるのである。この場合の登場人物の外見の美しさというのは、登場人物の外見の統一感といったものを指す。

この分類の特徴は、作品内でボーカロイドの外見が見られないというものである。これはボカロ P が統一感といった外見の美しさにこだわり、理想としたためであると考えられる。ボーカロイドの外見の「操作」では実現されることがない統一感が、登場人物を一から作ることによって、生まれると思われる。物語性の考察と同様、創作における自由を追求した結果、ボーカロイドの姿が作中に登場しなくなったのである。このボーカロイドの外見の不在は、ボカロ P の「操作」の一種であり、ボーカロイドの姿が見られない〈カゲプロ系〉においては、ボカロ P は劇に用いるための人形を製作しているといえる。ボカロ P が、登場人物であるキャラクターの外見から創作し、そのキャラクターらによって、物語が展開することからそういえる。

以上より、三つの分類において、「人形」という言葉の意味合いは異なっていることが分かる。〈カゲプロ系〉ではボーカロイドの扱いは声優のように考えられるが、それでも、ボーカロイドのもつ共有されたイメージは完全に失われてはいないと思われる。

では、インターネット外の舞台作品において、「人形」という言葉の意味合いはどう考えられるだろうか。「THE END」、「イーハトーヴ交響曲」では2作共に、外見への「操作」が行われていた。これは〈大罪系〉と同じく、ボーカロイドを物語に合うようにするためであろうと考えられる。「イーハトーヴ交響曲」は作品全体でみた時、〈大罪系〉として分類されるように思われる。この作品においてボーカロイドの外見への「操作」は、全編を通じてなされているわけではないが、歌詞表現、富田の寄稿文から「演者」としての初音ミクという側面を見出すことが出来る。〈大罪系〉と〈カゲプロ系〉の違いは、動画上にボーカロイドの姿が見られるか否かである。歌詞からは殆ど自己言及的な表現がみられず、初音ミクの姿がなければ、「イーハトーヴ交響曲」は〈カゲプロ系〉と分類されていたであろうが、この作品において初音ミクの姿は舞台上で見られる。富田が述べていた人間が演ずる以上のものが生まれることが理由として、ボーカロイドの声という「要素」は、この

交響曲において、必要なものであつたらうと考える。しかし、何故、外見という「要素」もこの作品に残したのであろうか。極論であるが、他のオリジナルなキャラクターあるいは宮沢賢治の作品のまま登場させてしまっても、物語として成立すると思われる。しかし、冨田はあえて初音ミクの姿を舞台の上に残した。「THE END」は、ボーカロイドの死というテーマ上、初音ミク(ボーカロイド)の姿は不可欠な要素であると考えられ、外見が、舞台上に現れるのは、必然的であると思われる。〈カゲプロ系〉では「人形」の役割の一部である外見をあえて排している。「イーハトーヴ交響曲」で、初音ミクはソリストとして起用されていた。冨田のなかで、初音ミクはこの時、声優ではなく、歌手として扱われていたのではないかと考えられる。そのために、ボーカロイドの姿が、舞台上に現れることになったのではないだろうか。

現時点で、〈カゲプロ系〉と分類される舞台作品は見つけられていない。しかし、ボーカロイドを使用した舞台作品において、ボーカロイドの外見の不在というのは、あり得るのだろうか。ボーカロイドの姿が不在になった時点で、それはボーカロイド作品ではなく、ボーカロイド作品を原案とした他の作品になるのではないだろうか。複数のキャラクターを〈カゲプロ系〉では1人のボーカロイドで演じているが、それは楽曲ごとでしかなく、一曲の中で複数のキャラクターを演じている訳ではない。オペラである「THE END」では、2人のボーカロイドを使って、演じている。〈カゲプロ系〉では、性別、外見が異なる複数のキャラクターを演じる必要がある。その時、1人のボーカロイドですべてを演じるのには、限界がある。そのため、ボーカロイドがインターネットの外に出るとき、外見というボーカロイドの形、共有されたボーカロイドのイメージから逃れることは出来ないのではないかと考える。

第三節 ボーカロイド作品における諸類型

第一節では歌詞において内面性より、情景描写が増えてきたこと、舞台作品においては自己紹介的ともいえるボーカロイドらしさへの回帰がみられることが分かった。第二節では、どの分類においても「人形」のモチーフでボーカロイドが語られうること、自己言及の要素がみられるというボーカロイドらしさへの回帰から、舞台上で見られるボーカロイドは、バーチャルアイドル性をもつということが分かった。

本稿では、インターネット上に投稿された動画、上演されたオペラなどのボーカロイド作品を分類した。この3つの分類は〈消失系〉、〈大罪系〉、〈カゲプロ系〉と重なる期間もあるが、順に登場しているといえる。本節では、時系列的に登場しているこれらの分類はどのように位置付けられるかを考察していく。

〈大罪系〉は〈消失系〉の発展形と捉えられると考える。〈大罪系〉の特徴である演じる存在である「演者」の側面を持ったボーカロイドという個性は、〈消失系〉にみられた「操作」されない、ボーカロイドそのものという特徴があるからこそ、「演者」という側面が浮かんでくるのではないかと思う。ボーカロイドそのものとして、作品に登場していたからこそ、演者として作品に登場するということが、変化であるというように感じるのである。

〈カゲプロ系〉という分類は、ボーカロイドの姿が排された、〈消失系〉、〈大罪系〉とは大きく異なる特徴がみられた。しかし、〈カゲプロ系〉もボーカロイド作品であり、ボーカロイド作品の発展形である。この分類においては、ボーカロイドの姿が在るという表現から、ボーカロイドの姿が見られない表現になる。ボーカロイドの作品でありながらも、ボーカロイドの姿は見られなくなる。しかし、ボーカロイドの大きな要素である声は、〈カゲプロ系〉にも残っている。インターネット上で受容されているボーカロイド作品は、受容者側に「これはボーカロイドが歌っている」という前提がある。〈カゲプロ系〉は、そうした受け手たちの前提理解の元に受容されているのではないだろうか。インターネット上で見られた〈カゲプロ系〉は、ボーカロイドの姿は作品中に登場しないが、ボーカロイド作品であるという認識が共有された状態で、受容されているのではないかと考える。ボーカロイドの最大の要素は、声である。ボーカロイドの声のみを使用し、表現されている〈カゲプロ系〉は、これまで〈消失系〉、〈大罪系〉と続く、ボーカロイドの文脈の上に成り立っているのではないか。ボーカロイドが登場して、11年が経ち、ボーカロイド文化の土壌は出来ている。〈消失系〉、〈大罪系〉もボーカロイド文化という資源を利用していると考えられるが、声のみでボーカロイド作品である、という〈カゲプロ系〉はもっともその資源の恩恵を受けている分類なのではないだろうか。その資源を利用する、という意味で、〈カゲプロ系〉はボーカロイドを使用して作品を作る必要があったのではないかと思う。今日、ボーカロイド作品として作られた物語が小説化、アニメ化されるようになった。ボーカロイド作品は、このようにインターネットの世界を超えて、他のメディアに広がっている。これは、ボーカロイド文化の1つの到達点といえるのではないか。

舞台作品においては、単純に〈消失系〉と〈大罪系〉と分類するのは、困難であった。

インターネットの外の作品といえる舞台での作品では、〈消失系〉と〈大罪系〉の要素を備えているという特徴が見られた。そのような作品に登場している初音ミクは「演者」としての初音ミクと「個性ある存在」としての初音ミクの側面を持っていたと言える。インターネットの文化が浸透していないフィールドに初音ミクを出す時、「ボーカロイドの初音ミク」という記号性が必要、あるいはその名前がもつ記号性から完全に逃れることは出来ないのではないだろうか。インターネット上の作品とは異なり、舞台作品の場合は、前提理解の元に受容されるとは限らない。そのため、自己紹介的な要素を作品中に織り込む必要が生じ、「個性ある存在」としての初音ミクの側面が舞台作品には見られるのではないだろうか。

しかし、そのままの姿では作品世界に馴染むことが出来ず、そのため外見に「操作」を加える必要が生じ、〈大罪系〉に該当するような外見の「操作」が作品内にみられるようになるのではないだろうか。舞台などの作品では、「演者」としての初音ミクと「個性のある存在」としての初音ミクという 2 つの側面を作品中に垣間見えるのではないかと考える。よって、〈消失系〉と〈大罪系〉はインターネット以外の他のメディアに出る際には、連続したものになるのではないだろうか。ニコニコ大百科を調査対象とした際の分類では、ボーカロイドの姿が登場するという条件から自己言及する、しないで分岐するようにしていた。しかし、自己言及する作品から自己言及しない作品へ派生すると考えられる。よって、筆者は〈消失系〉の発展形が〈大罪系〉であり、〈カゲプロ系〉もボーカロイド作品の表現のある種の発展形であると考ええる。

舞台作品といったインターネット外の作品は、ボーカロイドの姿があるまま、ボーカロイドを使用しており、バーチャルアイドル性を有しているといっても良い。インターネット上で受容されている〈カゲプロ系〉は、ボーカロイドの姿が不在になり、ボーカロイドの声のみ利用することによって、ボーカロイドの文化の恩恵を受けている。〈カゲプロ系〉がコミック、小説、アニメなどの他のメディアに出る際、ボーカロイドの姿はそこに見られずとも、これらの作品はボーカロイド文化の一つとして、人々に受容されることになる。両者は同様にインターネット外に出たものであるが、ボーカロイドの外見の有無という点でその方向性は大きく異なっている。しかし、どちらもボーカロイド文化の到達点であり、新たな可能性だといえるだろう。

【参考文献/URL】

- ・今井健斗,2013,「バーチャルアイドルのメカニズムとその活動」
- ・柴那典,2014,「初音ミクはなぜ世界を変えたのか？」
- ・円堂都司昭,2008,「「P」の悲喜劇 初音ミク周辺で回帰する八〇年のテーマ」,『ユリイカ』40(15):56-63
- ・富田勲,2013,「宮沢賢治×初音ミク、異色のオーケストラに託した思い 富田勲」,『美術手帖』985,:52-55
- ・monthly_悪ノ P, 2013,「ボカロ P インタビュー」『美術手帖』985, 38-39
- ・じん(自然の敵 P), 2012,『カゲロウデイズII -a headphone actor-』エンターブレイン

- ・ニコニコ大百科
<http://dic.nicovideo.jp/a/%E3%83%8B%E3%82%B3%E3%83%8B%E3%82%B3%E5%A4%A7%E7%99%BE%E7%A7%91>
- ・VOCALOID 曲シリーズ一覧
<http://dic.nicovideo.jp/a/vocaloid%E6%9B%B2%E3%81%AE%E3%82%B7%E3%83%AA%E3%83%BC%E3%82%BA%E4%B8%80%E8%A6%A7>
- ・小説 千本桜 <http://senbon-zakura.jp/>
- ・初音ミクオリジナル曲 「初音ミクの消失(LONG VERSION)」/cosMo@暴走 P
<http://www.nicovideo.jp/watch/sm2937784>
- ・【MEIKO】 悪食娘コンチータ 【鏡音リン・レン】/悪ノ P
<http://www.nicovideo.jp/watch/sm6328922>
- ・【神威がくぼ・他】 ヴェノマニア公の狂気
<http://www.nicovideo.jp/watch/sm11519178>
- ・VOCALOID4 がくっぽいど 株式会社インターネット
<http://www.ssw.co.jp/products/vocaloid4/gackpoid/>
- ・【弱音ハク】 ツマンネ 【オリジナル】/オワタ P
<http://www.nicovideo.jp/watch/sm3447689>
- ・GUMI オリジナル PV 「家出少年と迷子少女」【星ノ少女ト幻奏楽士】/cosMo@暴走 P
<http://www.nicovideo.jp/watch/sm13587322>
- ・【初音ミク+IA】 コノハの世界事情 【オリジナル PV】/じん(自然の敵 P)
<http://www.nicovideo.jp/watch/sm17397763>
- ・ryo(supercell) feat.初音ミク 『ODDS&ENDS』
<http://www.nicovideo.jp/watch/sm18626305>
- ・【初音ミク】 恋スル VOC@LOID(修正版) 【オリジナル曲】
<http://www.nicovideo.jp/watch/sm16702635>
- ・【初音ミク】 眠らせ姫からの贈り物 【中世物語風オリジナル】

<http://www.nicovideo.jp/watch/sm14539838>

・クリプトン 初音ミク V4X

<https://ec.crypton.co.jp/pages/prod/vocaloid/mikuv4x>

・富田勲「イーハトーヴ交響曲 Blu-ray」ダイジェスト映像

<https://www.youtube.com/watch?v=QYJ1sW6RgdQ>

・ボーカロイド・オペラ「THE END」

http://www.bunkamura.co.jp/orchard/lineup/13_end.html

・ボーカロイド・オペラ「THE END」特集ページ

http://www.bunkamura.co.jp/orchard/lineup/13_end/index.html

・渋谷慶一郎+初音ミク「THE END」がドイツ初上演、3度のカーテンコール

<http://natalie.mu/music/news/199650>

・初音ミク×渋谷慶一郎によるボーカロイド・オペラ「THE END」が上海でアジア初公演

<https://spice.eplus.jp/articles/3037>

・【VOCALOID OPERA】 "THE END" Artist Interview 【渋谷慶一郎・初音ミク】

<https://www.youtube.com/watch?v=Z1-YbcbAQ84>

【調査対象作品リスト】

ニコニコ大百科による調査作品リスト（ニコニコ大百科に記事が出来ており、かつニコニコ動画上に動画が3つ以上投稿されているシリーズのみ記載）

（左：作品名、右：作者名、下線つき：調査対象作品）

2007年

- ・あたまわるくなくいうた ワンカップ P
- ・護法少女ソワカちゃん kihirohito
- ・「消失」ストーリー cosMo(暴走 P)
- ・初音の愛した数式シリーズ Ackey++@坊主 P
- ・わPの100年シリーズ ワンカップ P

2008年

- ・或る詩謡いの人形の記録 青磁(即興電 P)
- ・空走庭園シリーズ cosMo(暴走 P)
- ・幻想論シリーズ キャプミラ P
- ・ツマンネシリーズ オワタ P
- ・七つの大罪シリーズ 七つの大罪シリーズ関連曲 悪ノ P
- ・First Sound Story 19-iku-
- ・ベンゼンシリーズ オワタ P
- ・MEIKO 無双 奈都魅 P
- ・森之宮神療所シリーズ くちばし P
- ・恋歌曲シリーズ れれれ P

2009年

- ・Continue シリーズ ピノキオ P
- ・SAM ナイトシリーズ samfree
- ・「終末」シリーズ ささくれ P
- ・Synchronicity～巡る世界のレクイエム～ ひとしづく P
- ・レインボーライン ジェバンニ P
- ・Yさん3部作 ジミーサム P
- ・わたしはミーム nak-amiP

2010年

- ・重金属英雄シリーズ SHO(キセノン P)

2011 年

- ・梅とら四字熟語シリーズ 梅とら
- ・カゲロウプロジェクト じん(自然の敵 P)
- ・中学嫌いシリーズ 石風呂
- ・PANDORA VOXX kemu
- ・星ノ少女ト幻奏楽士 cosMo(暴走 P)
- ・ほぼ日 P 原発シリーズ ほぼ日 P

2012 年

- ・幸福シリーズ うたた P
- ・地獄型人間動物園 れるりり他
- ・終焉ノ葉プロジェクト 150P
- ・女学生探偵シリーズ てにをは
- ・ヘイセイプロジェクト じっぷす
- ・マンボウの七夕三部作 家の裏でマンボウが死んでる P
- ・ミカグラ学園組曲 Last Note.

2013 年

- ・忘却日記 Diarays

ニコニコ動画タグ検索による調査対象作品リスト（「初音ミク」タグ 再生数が多い順にソート）

（タイトル 発表年号、下線つき：実写あるいは人物抜きの画像、()つき：対象作品外）

〈消失系〉

【初音ミク】みくみくにしてあげる♪【してやんよ】 2007

初音ミクオリジナル曲「初音ミクの消失(LONG VERSION)」 2008

「歌に形はないけれど」 オリジナル曲 vo.初音ミク 2008

【初音ミク】むかしむかしのきょうのぼく【オリジナル】 2010

初音ミクオリジナル曲「ハジメテノオト(Fullバージョン)」 2007

(3D みくみく PV♪ 2007)

【初音ミク・巡音ルカ】リンちゃんう！【鏡音生誕祭 2011】 2011

(【初音ミク】くるみ☆ぼんちお【オリジナル】 2009)

【初音ミク】ODDS&ENDS【Full Ver】 2012

初音ミクがオリジナル曲を歌ってくれました「Packaged」 Full Ver. 2007

【初音ミク】恋スル VOC@LOID(修正版)【オリジナル曲】 2007

初音ミクがオリジナル曲を歌ってくれました「Last Night, Good Night」 2008

【初音ミク】ヒビカセ【オリジナル】 2014

初音ミクオリジナル『えれくとりつく・えんじえう』 Full ver. 2007

(【PV 完全版】初音ミクの消失 -DEAD END-【MotionGraphics】 2009)

(ボカロ「初音ミクの消失」を、ヴァイオリンで演奏してみた 2013)

鏡音レンオリジナル曲 「鏡音レンの暴走(LONG VERSION)」 2008

【初音ミク】みんなみくみくにしてあげる♪【してやんよ】 2012

〈大罪系〉

『初音ミク』千本桜『オリジナル曲 PV』 2011

初音ミク が オリジナル曲を歌ってくれたよ「ワールドイズマイン」 2008

「ロミオとシンデレラ」 オリジナル曲 vo.初音ミク 2009

「卑怯戦隊うろたんだー」を KAITO,MEIKO,初音ミクに ry 【オリジナル】修正版 2007

【初音ミク】*ハロー、プラネット。【ドット PV】 2009

【初音ミク】桜ノ雨【オリジナル曲】 2008

【初音ミク(40音)】からくりピエロ【オリジナル PV】 2011

【初音ミク】深海少女【オリジナル】 2010

初音ミクがオリジナル曲を歌ってくれたよ「初めての恋が終わる時」 2008

【初音ミク】サイハテ【アニメ風PV・オリジナル曲】 2008

【ボカロ8人】Bad∞End∞Night【オリジナル】 2012

【初音ミク KAITO】サンドリヨン(Cendrillon)【オリジナル曲】 2008

『KAITO・ミク』カンタレラ(第二版)『オリジナル』 2008

【初音ミク】ミラクルペイント【オリジナル曲】 2007

(【報われない】アナザー：ワールドイズマイン【完成】 2009)

【ボカロ8人】Crazy∞nighT【オリジナル】 2012

『ミク×ルカ×カイト』ACUTE『オリジナル曲PV』 2009

【VOCALOID ミュージカル】Alice in Musicland【オリジナル曲】 2011

【ボカロ8人】Twilight∞nighT【オリジナル】 2013

〈カゲプロ系〉

【初音ミク】カゲロウデイズ【オリジナルPV】 2011

【初音ミク&GUMI】脳漿炸裂ガール【オリジナル】 2012

【初音ミク】ウミユリ海底譚【オリジナル曲】 2014

【初音ミク(40音)】トリノコシティ【オリジナル】 2010

【オリジナル曲】リンネ【初音ミク】 2010

【初音ミク】夜明けと蛍【オリジナル曲】 2014

【初音ミク】ストーリーミングハート【オリジナル曲】 2014

【初音ミク&GUMI】M.S.S.Planet【オリジナルPV】 2013

【初音ミク】メカクシコード【オリジナル】 2011

【初音ミク】メリュー【オリジナル】 2015

【初音ミク】恋愛裁判【オリジナルMV】 2014

(【手描き】カゲロウデイズ【自己解釈PV】 2011)

【初音ミク Soft】ハロ/ハワユ【オリジナル】 2010

【初音ミク】エンヴィキャットウォーク【オリジナル曲】 2011

【初音ミク&GUMI】一触即発☆禅ガール【オリジナル】 2013

【初音ミク】オレンジ【オリジナル曲】 2012

【初音ミク】白い雪のプリンセスは【オリジナル】 2010

〈その他〉

- 初音ミク が オリジナル曲を歌ってくれたよ「メルト」 2007
【オリジナル曲 PV】マトリョシカ【初音ミク・GUMI】 2010
初音ミクが声優のようにしゃべってラップして歌った！『ビハビ』PV付 2013
初音ミク・巡音ルカ オリジナル曲 「ワールズエンド・ダンスホール」 2010
初音ミクがオリジナルを歌ってくれたよ「ブラック★ロックシューター」 2008
初音ミク オリジナル曲 「裏表ラバーズ」 2009
初音ミク オリジナル曲 「ローリンガール」 2010
【オリジナル曲 PV】結ンデ開イテ羅刹ト骸【初音ミク】 2009
【調教すげえ】初音ミク『FREELY TOMORROW』（完成）【オリジナル】 2011
(VOCALOID2 初音ミクに「Ievan Polkka」を歌わせてみた 2007)
(【作業用 BGM】俺選！初音ミクメドレー 2008)
初音ミク が オリジナル曲を歌ってくれたよ「恋は戦争」 2008
初音ミク オリジナル曲 「アンハッピーリフレイン」 2011
【初音ミク】ゴーストルール【オリジナル曲】 2016
【初音ミク】1925【オリジナル曲】 2009
【初音ミク】こちら、幸福安心委員会です。【オリジナル】 2012
(【3DCG】くるっと・おどって・初音ミク【ねんどろいど】 2008)
- 【初音ミク】 え？ああ、そう。 【オリジナル曲】 2010
【初音ミク】Nyanyanyanyanyanyanya！【オリジナル曲】 2010
【初音ミク】二息歩行【オリジナル曲】 2009
初音ミクオリジナル曲 「Clac。」 2010
【初音ミク】般若心経ポップ【PVつき】 2010
【初音ミク】THE WORLDS【オリジナルジェットコースターPV】 2013
初音ミクオリジナル曲「from Y to Y」 2009
【オリジナル曲 PV】clock lock works【初音ミク】 2009
【初音ミク】妄想税【オリジナル曲】 2013
【初音ミク】ぽっぴっぽー【本店だよ！！】 2008
【初音ミク】ネトゲ廃人シュプレヒコール【ボトラー】 2010
(ガッチガチにしてあげる【初音ミク】 2007)
(ミク役「ほしのみゆ」ちゃんてハアハア 2007)
(「男女」アホの子増しマシ改良 ver.【バカ仆&ハルヲ】 2008)
(【完全版】初音ミク神曲メドレー【作業用 BGM 厳選 50 曲】 2009)
- 【初音ミク】家に帰ると妻が必ず死んだふりをしています。 2010

【初音ミク】すろおもおしよん【オリジナルPV】 2014
【オリジナル曲PV】Mrs.Pumpkinの滑稽な夢 2009
【ルカ ミク グミ IA リン】威風堂々【オリジナル】 2012
【初音ミク】腐れ外道とチョコレゐト【オリジナル】 2011
【初音ミク】「独りんぼエンヴィー」【オリジナル】 2012
(VOCALOID でニコニコ動画流星群【完成版】 2008)
(【初音ミク】よっこらせっくす【鏡音リン・レン】 2008)
[初音ミク] paranoia [オリジナル] 2012
(くるみ☆ぼんちお ver96猫 ※自重なし 2010)
エイリアンエイリアン/初音ミク 2016
【初音ミク (1640 録)】 タイムマシン 【オリジナル】 2010

【初音ミク】永遠に幸せになる方法、見つけました。【オリジナル】 2012
【初音ミク】トルコ行進曲-オワタ＼(^o^)/ 【アレンジ】 2008